

開館20年を迎えたせんだいメディアテークでは、ナラティブ（もの語り）をテーマとした展覧会を開催します。古くは民話に例をみるナラティブの様態ですが、今日わたしたちがアートと呼ぶ表現もその一形態として捉えることができるでしょう。それは個々の出来事や体験を他者へと開いていくさまざまな「語りの術」であると言えます。

この展覧会には、東日本大震災からの10年間、メディアテークとともに地域のなかで活動してきた表現者が、過去・現在・未来を見据えて、それぞれの観点であらわした10のナラティブが集います。

情報技術の発達とともにコミュニケーションは遠隔化し、ナラティブをとりまく環境は大きく変化してきました。そして、わたしたちはいま、新型コロナウイルスの流行によって、他者との空間の共有や、身体的な接触が困難になるという危機にあります。そのなかで、もちろんインターネットは有効な技術ですが、メディアテークではそれだけに頼らず、独自のメディアや技法の開発によって生まれる多様なナラティブを伝え、次の10年に向けて、一元的ではない世界の認識を提示したいと考えています。

Marking its 20th anniversary, Sendai Mediatheque presents an exhibition with the theme of narrative storytelling. In ancient times, folklore was one form of narrative; today, what we call art is another form. A narrative is a storytelling technique that opens up the happenings and experiences from a person's life to others.

This exhibition brings together ten narratives by artists who, in collaboration with Sendai Mediatheque, have worked in the local community during the ten years since the Great East Japan Earthquake. The narratives have been produced from the artists' own perspectives, eyeing the past, the present, and the future. With the development of information technology, communication has increasingly shifted to a remote format, and the environment of narrative storytelling has changed drastically. The current COVID-19 pandemic has made sharing physical space or contact with others difficult. In these circumstances, the internet is, of course, a useful technology. However, Sendai Mediatheque seeks not to rely solely on internet technology but to convey diverse narratives created from unique media and techniques with the aim of presenting a non-unitary perception of the world for the next ten years.

主催： せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）

後援： **NHK** 仙台放送局 **tbc** 東北放送 **仙台放送**
ミヤギテレビ **KHB** 東日本放送 **河北新報社**

朝日新聞仙台総局 読売新聞東北総局 毎日新聞仙台支局

産経新聞東北総局 日本経済新聞社仙台支局 **仙台リビング新聞社**

S-style **エフエム仙台** **F M 7 6 . 2 RADIO3 SENDAI JAPAN**

助成： 一般財団法人 地域創造、芸術文化振興基金

協力： 和光大学芸術学科松枝研究室

関連出版物

展覧会記録書籍「ナラティブの修復」
本展の写真記録とあわせ、識者による寄稿や作家による対談や座談会などで構成。
2022年3月発行予定。左右社より発売。
A5版変形。200頁相当。
ブックデザイン：有佐祐樹

お問い合わせ

せんだいメディアテーク企画・活動支援室
〒980-0821 仙台市青葉区春日町2-1
TEL：022-713-3171
FAX：022-713-4482
https://www.smt.jp

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、
本展の予定や内容に変更が生じることがあります。
その場合は当館のウェブサイトを通じて随時お知らせいたします。



ナラティブの修復 “Restorations of Narrative”

せんだいメディアテーク開館20周年展 Sendai Mediatheque 20th Anniversary Exhibition

smt せんだいメディアテーク
sendai mediatheque

2021.11.3 **水・祝** ～ 2022.1.9 **日** 10:00-19:00

休館日：11月25日(木)、
12月29日(木)～1月3日(月)

会場：せんだいメディアテーク6階ギャラリー4200／入場料：一般500円（大学生・専門学校生含む）、高校生以下無料、障がい者手帳・豊齢カード等をお持ちのかたは半額
展示作家：阿部明子、磯崎未菜、菊池聡太郎、工藤夏海、小森はるか＋瀬尾夏美、是恒さくら、佐々瞬、佐藤徳政、伊達伸明、ダダカン連
主催：せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）／後援：NHK仙台放送局、tbc東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ、KHB東日本放送、河北新報社、朝日新聞仙台総局、読売新聞東北総局、毎日新聞仙台支局、産経新聞東北総局、日本経済新聞社仙台支局、仙台リビング新聞社、せんだいタウン情報 S-style、エフエム仙台、ラジオ3 FM76.2／助成：一般財団法人 地域創造、芸術文化振興基金





出
展
作
家

阿部明子

Abe
Akiko

1984年宮城県美里町生まれ。2007年東北芸術工科大学デザイン工学部情報デザイン学科映像コース卒業。写真家。日常的な風景と自身の生活空間を編み込むようにしながら、画面内に異なる時空を複層させる写真表現をおこなう。近年の主な展覧会「阿部明子・是恒さくら展『闇-いき-を編む』」（塩竈市杉村惇美術館、2019年）。2017年宮城県芸術選奨新人賞受賞。



《レウムノビレ》（2017年）

是恒さくら

Koretsune
Sakura

1986年広島県生まれ。2010年アラスカ大学フェアバンクス校卒業。2017年東北芸術工科大学大学院修士課程地域デザイン研究領域修了。日本の東北地方や北米各地の捕鯨、漁労、海の民俗文化を尋ね、リトルプレスや刺繍、造形作品として発表する。リトルプレス『ありふれたくじら』主宰（Vol.1～6既刊）。近年の主な個展「N.E. blood 21: Vol.67 是恒さくら展」（リアス・アーク美術館、2018年）。



《ありふれたくじらジャーナル：牡鹿半島～太地浦》（2017年）

磯崎未菜

Isozaki
Mina

1992年東京都生まれ。2019年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。特定の土地に根付く童謡や労働歌などを手がかりにしながら、場所に添った新たな“うた”を作る「小民謡プロジェクト」を軸として、主に映像を用いた作品制作をおこなう。現在は仙台市を拠点に、「一般社団法人 NOOK」のメンバーとしても活動する。近年の主な個展「singing forever 高砂」（秋田公立美術大学ギャラリー BIYONG POINT、2019年）。



《広場のうた #臨城場所》（2018年）

佐々瞬

Sasa
Shun

1986年宮城県生まれ。2009年東京造形大学美術学科絵画専攻卒業。身体的な実践によって、過去の出来事を現在のなかに捉えなおすことで、個人や共同体の失われた関係性の再構築をはかる。東日本大震災後は、半壊した宮城県沿岸部・新浜の住宅を借り受け、アーティストや建築家を招聘するプライベートなレジデンスプログラムなども企画する。近年の主な個展「公園／ローカルの流儀」（Gallery TURNAROUND、2021年）。



《〇〇のためのサバイバル》（2009年）

菊池聡太郎

Kikuchi
Soutarou

1993年岩手県生まれ。2019年東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻修了。主に風景を主題としたドローイングと建築素材を用いたインスタレーション作品を発表する。他に空間設計や什器設計/制作を共同でおこなうユニット「建築ダウナーズ」、宮城県を拠点に編集やキュレーションなどを協同でおこなうアーティストグループ「PUMPQUAKES」としても活動する。近年の主な個展「喫茶荒地」（Gallery TURNAROUND、2019年）。



《燃えた山》（2019年）

佐藤徳政

Satou
Tokumasa

1981年岩手県生まれ。東京でデザインや住宅設計の仕事に携わっていたが、震災を機に帰郷し、共鳴する仲間達と日常を豊かにしていくためのクリエイティブ集団「FIVED」を主宰する。震災で途絶えた地域の七夕祭りの復活や、神楽を創作する活動のほか、嵩上げ工事で埋められる巨石「五本松」の記録をおこなってきた。近年の主な展覧会「巨石装置『五本松』展～陸前高田森の前地区からの表出」（せんだいメディアテーク、2016年）。



五本松神楽のイメージ

工藤夏海

Kudou
Natsumi

1970年宮城県南三陸町生まれ。絵画、立体、版画、人形と様々な方法で表現をおこなう。2015年頃から小さな布の人形を用いてテーブル上で「まちがい劇場」と称した人形劇未経験者との即興人形劇を始める。人形劇がこころの抛り所となるよう活動を続けながら技法の探究をしている。他に仙台のバンド「yumbo」のメンバーとしても活動する。近年の主な個展「世の中グラデーション」（Gallery TURNAROUND、2017年）。



《a-u-o》（2015年）

伊達伸明

Date
Nobuaki

1964年兵庫県生まれ。1991年京都市立芸術大学美術学部大学院工芸科修了。2000年より「建築物ウクレレ化保存計画」を始め、現在までに寺院、学校、一般住宅など約80物件の建物をウクレレ化している。各地での個展開催の他、地域資源再発掘型の企画構成にも関わる。仙台では2012年から「亜炭香古学」を監修し、2015年に展覧会「山のひかり川のほし」（せんだいメディアテーク）を開催。2017年からは「しらべの細道シリーズ」（東北リサーチとアートセンター）を監修。著書に『建築物ウクレレ化保存計画2000.4～2004.3』（青幻舎、2004年）。



《桃林堂ウクレレ》（2020年）撮影：表恒匡

小森はるか+瀬尾夏美

Komori
Haruka +
Seo
Natsumi

映像作家の小森と画家・作家の瀬尾によるアートユニット。2011年3月に、ともに東北沿岸へボランティアに行ったことをきっかけに活動を開始する。2012年より3年間、陸前高田市に暮らしながら制作に取り組む。2015年には、土地と協働しながら記録をつくる組織「一般社団法人 NOOK」を設立し仙台市に拠点を移す。現在は陸前高田、仙台、東京などで、風景と人びとのことばの記録を軸に制作と発表を続けながら、対話の場づくりなどもおこなっている。



《みえる世界がいなくなった コロナ対話の広場》（2020年）

ダダカン連

DADAKAN-
Ren

仙台在住の糸井貫二（ダダカン）氏に惚れこんだ有志一同。メンバーは、美術・メディア研究者の細谷修平、元・美術館学芸員の三上満良、ギャラリー主宰の関本欣哉、アーティストの中西レモン。細谷と中西は2008年より糸井宅を訪れるようになり、関係者を含めたインタビューと映像記録に取り組む。三上は2009年に「前衛のみやぎ-昭和期芸術の変革に挑んだ表現者たち」（宮城県美術館）を企画、戦後前衛美術の文脈で調査・研究し、郷土の表現者として糸井氏を取り上げた。関本は「2012・仙台アンデパンダン展」を皮切りに糸井氏との交流を続け、現在進行形の糸井氏の生活と表現に目を向けている。



ダダカンこと糸井貫二氏 鬼放舎にて（2008年）

・画像は参考です。本展の展示内容とは異なる場合があります。

